

## 母校創立150周年の節目に

神村ふじを

母校の小学校の教頭先生から突然電話が入った。PTAの役員に話をしてほしいとのことだった。母校が創立150周年を迎えたので、卒業生である私に学校の歴史などを含めて、「何でもいいから話してくれ」とのことだった。

「何でもいいなあ？」「何でもしえっす」「何でもいいげば……」ということでも話をする事になったのだが、蓋を開けてみたら、保護者の授業参観の日に話をする事になっていて、役員研修ではなくなっていた。保護者全員という、大人に話をするという大変なことになっていたのだった。

元々小学校の教師なので、子ども相手の話は何とかできそうだが、大人に話すとなるとやはり気が重い。大体教師の話などというのは面白くないのに決まっている。1時間も我慢してもらおうのは辛い話だ。

けれども引き受けてしまったからにはしょうがない。母校の歴史についてもすべてわかっているわけではないので、勉強する機会をもらったと思ひ直して、町史にも目を通したり、創立100周年の記念誌を繙いたりしながら、話を組み立てようと思った。

私の母校の左沢あてざわ小学校は、明治6年の4月10日に開校した。今年で150周年の節目の年になった。私の住む地区の中では一番早かったので、「第一番左澤学校」と称して、町の人のその誇りたるや凄まじいものがあったようである。第一番左澤学校から遅れることひと月、隣村に学校ができ、それから次々と周辺の町村に学校が広がっていった。

明治新政府は、1872年（明治5）9月4日に学制を發布し、全国に5万4千余りの学校をつくと宣言をした。地方においては、教育に対する温度差や財力など地域格差があり、相当な時間をかけて全国津々浦々まで広がっていったのだろうと思われたが、調べてみると意外に早く学校が浸透していったようである。その背景には、寺子屋に似た「郷校」と呼ばれるものが各地にあったことが大きく影響しているようだ。

また、時代背景を見てみると、1853年（嘉永6）、ペリーが浦賀にやって来て、煙を吐く重い鉄の船がプカプカ浮いているのを市民は驚きの目で見ているし、長州藩が下関戦争で英仏蘭の軍艦からバガスカと大砲を打たれて大敗してしまうという衝撃的な出来事もあった。ヨーロッパ列強との歴然とした国力の差を目のあたりにした新政府が、教育に力を入れなければならないと痛感し

ていたことは容易にわかる。

かたや戊辰の役で負けてしまった諸藩も、教育に力を入れるべきだとの認識が広まっていたようだ。

奥羽越列藩同盟の雄藩長岡藩は、7万4千石から2万4千石に減封されてしまい大変困窮していた。そこに支藩の三根山藩から米百俵が送られてきた。いわゆる「米百俵」の逸話である。家臣たちは大変喜び、これで明日の米には困らないと思う間もなく、大参事小林虎三郎は、「百俵の米も、食えばたちまちなくなるが、教育にあてれば明日の一万、百万俵となる」と藩士たちを諭した。藩士たちは、この虎三郎の態度に今にも掴みかからん勢이었다そうだが、虎三郎はこの政策を押し通し、「国漢学校」を設立した。

これが後に山本五十六のような人物を輩出するのだから、米百俵をただ食ってしまったら、どうなっていたかわからない。

戦争に勝った新政府側も負けた幕府側も、これからの教育の必要性を強く感じていたのは間違いないように思う。

そのような時代背景があつて、学制発布から3年後の1875年(明治8)には、計画とほぼ同数の学校が創立されたようである。ただ、就学した児童は、学齢に達した児童の約半数に満たなかった。特に女子の就学率が極めて低かった。「女に学問はいらぬ」という思想が沁みついていたのだらう。

左沢に早く学校ができたのには理由があつて、一つには庄内松山藩の飛び地の城下町であり、「郷校」があつたので、教師を確保しやすかつたことが挙げられる。二つめに、廃藩置県となり陣屋が機能しなくなったので、それを学校として使うことができた。三つめに、最上川の舟運で栄えた左沢の人たちには、何よりも教育に対する熱い思いと財力があつたからだと言われている。

生徒三百名余、教員は、松田彦三、大谷哲造、多々倉和一郎、世話掛五十嵐信可を以て初めとなし、経費は生徒の授業料と人民有志積立の利子のみを以て之を支弁。故に教員は微給。書籍器械は整はず、教場には畳を敷き、従前の平机を列ね、子弟之に座し、以て講話をなせり。然れども此の時に当り、西村山郡中未だ小学の設もなく本校実はその嚆矢たる故に、第一番学校と称して最も隆盛の名を得たり。

教員は「薄給」ならぬ「微給」であつたが、この記録には、第一番学校と称した左沢の人たちの感慨と自負が溢れている。

その左沢小学校も少子化が進み、全校児童数220名まで減ってしまった。それにコロナが拍車

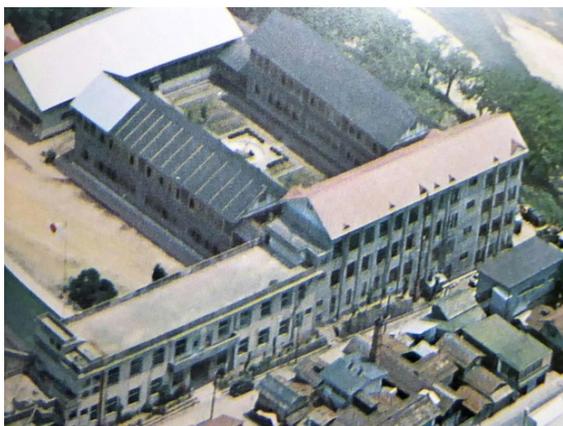


第一番学校・旧松嶺藩陣屋

陣屋を学校に改築している時の記録



「第一番左澤学校」の印が押された教師用の本



1988年（昭和63）の移転まで使われた校舎

を掛け、町全体でも出生者数が激減している。  
超少子化、AI社会への対応、不登校・問題行動、特別に支えが必要な児童の増加等々、学校における指導の中心であった「読み書き算盤」だけでは、これからの社会を乗り切っていけない。  
創立150周年の節目は、学校教育変革の大きな節目でもあると悟った「第一番左澤学校」のPTA講演会であった。

小春日の笑ひの取れぬ講演会 ふじを